

国内福祉研修報告書

私は、8月31日から9月2日にかけて、高齢者ボランティアサークルごまちゃんの一員として秋田県藤里町で活動を行った。秋田県藤里町は秋田県の北端に位置する、人口3,800人の、高齢化が進んだ町である。藤里町社会福祉協議会は、ひきこもり支援を筆頭とし、地域性に合わせたユニークな取り組みを行っている。

ごまちゃんが藤里町社会福祉協議会にご協力いただいて藤里町で活動するようになってから既に10年以上経過した。毎年継続的な交流を続けており、今では私たちの訪問を心待ちにしてくださっている方々もいる。今回の活動では、今まで交流を続けてきた一人暮らし高齢者宅や高齢者施設、高齢者グループの訪問を中心とし、藤里町社協の事業についての勉強会、社協の方との交流会、里山見学など、地域に関する理解を深める機会もいただいた。

以下、今回の活動のまとめとして、藤里町の方との交流と、社会福祉協議会の事業について記す。

・藤里町の方との交流

今回の訪問では、一人暮らし高齢者、社協デイサービス、北部地区の皆さん、熟年バレーチーム、生活支援ハウスぶなっち、社協の職員の方と交流する時間があった。いずれもこれまでの訪問で継続的に関わりを持ってきた方々である。そのため、多くの方がごまちゃんの存在を知っており、私たちの訪問を喜んでくださる。中にはごまちゃんの顔や名前を覚えてくださっている方もいれば、部屋に写真を飾ってくださっている方もいる。また、私たちごまちゃんも、それぞれが「〇〇に行つて〇〇さんに会いたい」といったように、藤里町の方に親しみや愛情を抱いている。東京の大学生と秋田県の高齢者、普通に生活していたら出会わない人達が確かな絆を築き上げていることに感動を感じる。

今回の交流の中でも印象的だった場面は、熟年バレーチームとの交流である。熟年バレーチームは、藤里町にある体育館に週2回集まって練習している。試合は8人制で、熟年層向けの独自のルールで行われている。チームの方々は、仲間同士で集まって体を動かしたり、休憩時間や練習後に輪になって話すことが生きがいになっているようだ。ごまちゃんは藤里町に訪問すると、毎回このチームとバレーの対決をする。熟年層といえどもその体力、実力は侮れず、県大会に出場し3位に入賞するほどである。ごまちゃんはいつも大きな点差をつけられて負けてしまっていた。しかし、今年はなんとごまちゃんチームが初勝利を遂げたのである。運動神経が良く、身長が高い後輩が入ったこと、熟年バレーチームが前日に県大会があり燃え尽き気味だったことが勝因だったと思われるが、バレーチームの方々は「上手になったよ〜」「いい試合だったねえ」とたくさん褒めてくださった。今まで惨敗だったごまちゃんが勝利を遂げたことで交流は大盛り上がりであった。また、バ

レーの試合の合間には、枝豆の鞘をもぎとる作業を体験させていただいた。藤里では枝豆を作っている方が多く、畑ではなく田んぼで作る方もいるそうである。「今時こんなことなかなか経験できないでしょう」と言いながら、枝豆の収穫の仕方を教えてくださった。後日収穫した枝豆を塩ゆででいただいたが、豆の味が濃くとても美味しかった。

・藤里町社会福祉協議会の事業

藤里町は高齢化率が44.9%（昨年7月時点）と、全国平均を大きく上回る。人口減少にも歯止めがかからない。厳しい現状の中、藤里町社会福祉協議会では、町民すべてが生涯現役を目指せるシステムづくり事業を開始した。今回はその事業の内容や現状などについて、社協の職員さんよりお話ししていただいた。

事業の概要は「町民全てが生涯現役を目指せるシステムをつくる。老いも若きも、障害があってもなくても、参加できる人づくり。その力を最大限に活かせる仕事づくり。そんな過疎化の町で全ての町民が生き生きと輝いて暮らす町づくりは、若者にとっても住みやすい町になる。」である。そして主な事業は、人づくり事業、新たな仕事づくり事業、若者にとっての住みやすい町づくりを考える事業の三本柱である。

その中でも、私が面白いと思ったのは、プラチナバンク事業の立ち上げである。プラチナバンク事業立ち上げの経緯として、これまで藤里町社協の取り組みとして行われてきたシルバーバンク事業とこみっとバンク事業の存在がある。シルバーバンク事業は65歳以上の方が登録し、その登録者に合わせた仕事、働き方を紹介する事業である。こみっとバンク事業は、ひきこもり支援の一環であり、ひきこもり者が紹介された仕事をしながら訓練を積み、社会的能力を身に付けることを支援する事業である。シルバーバンク事業の登録者は、仕事の経験が豊富で頭がきれるが、仕事をする体力がないという方が多く、こみっとバンク事業の登録者は、仕事をする体力はあるが、人との関わりが苦手な社会的経験が少ないという方が多い。そんな二つの事業の登録者が互いに力を合わせて活動するようになったのが、プラチナバンク事業の始まりである。

プラチナバンク事業は、障害者、高齢者、ひきこもり者、デイサービス利用者、施設利用者などを含む町民全てを対象としており、ゆくゆくは町民全員が登録することを目標としている。プラチナバンクは、収入、仕事時間、やる気、経験から自分に適した働き方を登録できる。年に数回短時間だけ仕事をする人もいれば、週に5日しっかり働く人もいる。多様なニーズに応えることで、町民全てが生涯現役を目指せる町にすることを可能にしようとしている。

プラチナバンク事業のユニークな取り組みの一つとして、「根っこビジネス」が開始された。山菜の根っこを収穫し、根っこを叩いてでんぷんを取り、でんぷんを粉にして、そこからわらびもちを作ろうというプロジェクトである。現在、でんぷんを粉にする段階まで進んでいるとのことである。近い未来に、わらびもちが藤里町の名産品となるかもしれない。

私は今まで、藤里町のたくさんの高齢者とお話しをしてきたが、そのお話しの中で、自分の子どもが藤里町を出て、秋田市内や関東圏に行ってしまったということをよく耳にした。藤里町の過疎化と高齢化は着実に進んでいると、話を聞くたびに感じさせられる。そして一方で、藤里町の高齢者のパワーにはいつも圧倒させられる。70代、80代になってもまだまだ元気な方がたくさんおり、その方々の知恵は私たちには到底かなわない。若者の働く場所や住みやすい環境をつくること、今現在たくさんいる高齢者の力を活用することで、藤里町はこれから今より活気のある町になるのではないかと期待している。藤里町社会福祉協議会は、地域の問題に焦点を当て、地域性に合わせたユニークな取り組みを精力的に行っているため、学ばせていただくことが多い。藤里町の今後の取り組みや展開から目が離せない。

・感想

高齢化、過疎化が進んだ小さい町と聞くと、寂しく、暗いイメージを持つことが多いが、そうではない。藤里町のように、高齢者になっても仲間と笑いながら明るく元気に過ごしたり、地域性に合わせた取り組みを行い、状況を立て直そうと力を合わせている町がある。今回の訪問では、そうした過疎地の可能性を再認識させられた。次に訪れたとき、一年後、五年後、十年後、藤里町はどうなっているのか、楽しみである。

ごまちゃんが訪問するたびに温かく受け入れてくださる藤里町の皆様、そして、このような企画をする上で全面的にご協力いただいている藤里町社会福祉協議会の皆様には、感謝の意を表したい。